

---

# デ力物語(未来)

田沢舞矛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
デ力物語（未来）

【Zコード】

Z0546Y

【作者名】

田沢舞矛

【あらすじ】

高木涉（警部補）と佐藤美和子（警部）のお話

設定は未来

娘の妙和と幸せに生活中

話は変な方へ（^ = Rは付かないよ！絶対に

こんな未来書いてほしい！…とかあればヨロシクお願ひします（

|  
|  
m

## 1 (前書き)

おもてなし想頭で頑張つてますよーーー！

「あれつ？渉くん今日早番だつけ？？」

「ああはい！！！」

あ、そうか私と1田違ったもんね」

高木涉##5年前同僚&先輩の佐藤美和子とゴーリキン  
今は美和子、美和子の母、そして・・・

「パパ行くの？？」

「うん。昨日のママと同じ時間に帰つて来るからね」

# 娘の妙和と生活中 みかず

ババ嘘じやない?

事件が早く解決したらね

妙和は嬉しそうだ

あ、涉くん、今日帰つて来るとき私の机にある事件ファイル持つ

で見て

「・・・僕、昨日帰つて来るとき美和子さんの机の上に確か10冊ほど分厚いファイルが置いてあるのを見ましたよ」

「あー松崎家の殺人事件のやつ持つてきて」

その舌をだす行為禁止にしてください  
僕、キュン死しちゃいます

「わかりました。松崎家ですね」

「どうも\*\* 高木警部補」

高木警部補 それが僕の階級

えつ？ 美和子さんと同じ階級だつて？

美和子さんは警部に上がつたよ・・・僕に追い抜ける日が来るのか  
な・・・

僕が警部補に上がつたと報告するより先に美和子さんが走ってきて  
「涉ぐーん警部に昇級したよー」  
だもんね

「あつ・・・時間だいつてきます」

『『いつてらつしゃい』』

・・・いつの間にかお義母さんまで・・・

「いつてきます」

「たつ かぎーオッス！…」

「ゆつ 由美さん…」

「玄関に探偵団、来てたわよ」

探偵団・・・コナンくん達か  
今日は約束もないし・・・

「…今日は約束なかつたよな・・・て顔してる・・・」

「はい。今日は何にもないですし・・・事情聴取は明日ですし」

「届け物らしいわよ」

はつー？前の事件の渡し忘れ？いや、ただ犯人が首を吊つてただけ  
だし・・・  
だけつて・・・警察失格だよ・・・いや

『高木刑事』

探偵団の皆が走ってきた

「さつきね佐藤刑事に会つたんだあ…で私達今から社会科見学があるから渡しに来たの」

「ありがとう。社会科見学の方は大丈夫なの？」

「・・・大丈夫よ、小林先生・・・いや白鳥先生つていつた方がいいのかしら・・・捜査一課なら良いって言つてたから。条件付きでね、あつ今は捜査一課にいるわよ」

相変わらず6年になつてもクールだなあ哀ちゃんは

「条件つて?」

「白鳥刑事に弁当届けるんだよ」

「白鳥さん?」

「でも今いみたいだね」

ああだから今日白鳥さん調子がわるかつたんだ...

「今日白鳥さんなら4丁目事件に行つてるよ、メモと一緒に置いておひつか

「うん」

それからこうこうとあつたが何とか早めに切り上げる事ができた

「・・・松崎家の殺人事件のファイルは・・・」

「あれ？高木さん・・・何やつてるんスカ？  
いくら夫婦だからって机をいじつちやあ／＼」

「千葉＝＝松崎家のファイル知らないか？探しても見当たらん  
だよな」

「もしかしたら机の中とか・・・昨日佐藤さん机の中に青いファイ  
ル入れてましたよ」

流石千葉、よく見てる

「何番田？..」

「確か一番大きい引き出し・・・」

「あつあつたあつた／＼あ」

「高木さんどうかしました？」

「今日何日？」

「7月25日ですけど」

そこには黄緑色の袋に入った小さな時計があつた  
そして『Wataru』と彫られていた

「高木さん良かつたですねーーー」

「ああ  
んじゃ帰るとか」

「直ぐに調子にのむお父さんって子供が苦労しますよ」

「娘の前では立派な父親でいたいよ・・・」

「おや高木くん」

「白鸞さん」

「これ僕の机の上に置いてありましたよ」

「ああ  
@&  
」

「それって妙和ちゃんが生まれるちょっと前の写真だよな」

「はあ／＼でも僕のはちゃんと定期入れに入っていますけど」

「佐藤さんのです？」

「ああ、そうか」

「高木くん！！！」

「日暮警部！！」

なんで帰らうとするヒヤヒヤ感など…

「君にお届けものだ」

「パパ～」

「妙和！？何で？？」

「もー妙和つたら出るの早すぎよー」

「美和子さん！？」

「へつー？なんで一人が

「いやあ渉くん帰つて来るの遅いし私ももう張り込みの時間だから  
連れてきて渉くんに預けようかと」

「もし僕がいなかつたらどうしてたんですか？」

「渉くんの机の上にメモ残して由美のアパートに連れてこいつかと」

はあその手があつたか

「でもお義母さんは？」

「あー突然友人の法事に」

「パパ肩車して～」

美和子さんと同じ顔で訴えられると弱いんだよな僕

「やつた～」

「あつ 時間だ！！田暮警部！！1丁目の張り込みいつてきます」

ーああ頼んだぞー

「了解！！んじや妙和おやすみ」

「おめでとう!! あ、渉くんお誕生日おめでたー!!」

おにがどくにまわる おに鏡を付けて

漢石元隸上書工之文

「妙和ちゃん将来の夢は？」

「パパとママみたいな捜査一課の刑事さん」

「そーか頑張つてね」

「ママにできただから私もできるもん」

白鳥さんすゞい顔してゐ

「まあ妙和、前の不審捕まえたもんな」

「うふーー踵落としと関節固め」

「妙和ちゃん何歳?」

おーあれ以来初めて警部が口を開いた

「4歳」

「後20年か」

「?」

「高木ー早く帰つたひどいだ

「あつねー」

「妙和ちゃんの腹の虫泣いてるや」

「帰つてコンビニでも寄つたりひつだ

「前のセブンイレブンおきつ半額セールやつてるや」

「あつあつがとひざこます、お先に失礼します!妙和行こつか

「うん」

「明日は佐藤くんと交代の時間だからな。遅刻したぶんだけ佐藤くんに迷惑がかかるだ

「了解しました」

### 3 (後書き)

何とかギリギリ・・・  
キスシーン出したい（；、）

#### 4 (前書き)

感想有難うござります  
作者の性格はバカなので許してね

「ねえねえパパ？ママってスゴいの？」

どきつ

まさかとは思つが・・・

「何でやつ思ひの？」

「パパより偉そうだから

やつぱつやつきた・・・

「確かにママは偉いよ。でもさつき一緒にきた田畠警部わかる？あの人よりはまだ下だよ」

「・・・パパよりは偉いよね？」

「んー・・・まあね」

「決めた！！！妙和絶対パパより強い正義の味方になる・・・でね、事件がない世界にするんだー！」

まだまだ可愛い夢だなあ

「妙和？正義って言葉は心の中で囁えるモノなんだよ？言葉に元だしたら正義じゃないんだ」

「？」

あー美和子さんも分からなこときこひんな顔するよなあ

「・・・後でママでおひき持つて行ひつか

「ひき――――

「・・・あひ涉くと有難ひ

「・・・あひぱつぱつ白鳴わこですか

「やひぱまひて・・・・

「おひあつこおひて

「有難ひ涉くん 昳布あるかなー

「・・・田鳴さんは?

「僕は澄子さんにサンディッシュ作つて貰つてますから

「愛妻弁当ですか・・・

「こひただきまーす

「あひお茶ヒジユース後ろに置いておきますね

「了解」

「じゃあ明日の交代の時間にまたきます」

「OK……高木涉警部補」

「……美和子さん乐しまないで下せこ」

「つに乐しくて、あつお母さん明日の朝に帰つてくるから」

「わかりました報告有難い」

## 5 (前書き)

げき短文・・・

理江が担当致しました

・・・悔しいけど舞矛のほうが才能あるかも

朝 7:20

「涉さん時間は・・・」

「・・・・  
？」

あれつ？お義母さん？

「もう起きないと遅刻しますよ」

ええええ!!!!すみませんワカワカ。。。

一 渉さん美和子と交代ですか?「

はい

一ノれ郵便局で……渡して置いておけ。

—あ、は、いわかりました

「から  
一渉さんが・・・て考えてぢやあダメよ昼の12時までに郵便局だ

「わかりました」

「美和子さんと田嶋さん交代ですか」

「あ、いつもみんな時間?」

「……高木くん一人で?」

「いえ後で千葉がきます」

「ほひ」

「あ、美和子さん!」れを……お義母さんが直ぐに郵便局に……

」

「へえわかったわ。妙和は?」

「多分まだ寝てる……僕が出発したときまだ寝てましたし」

「わかったわ。有難うね」

「いえ……」

「千葉くんが来たよつだ」

「田嶋さん、これ美和子さんと食べこ下れこ」

「有難う」

## 6 (前書き)

高佐好きさんへ  
グダグダな文でお許しくだされ(汗)

今回は千葉が登場します

コナンの雰囲気だせてなくてスミマセン

「後はお願ひしますね」

「わかりましたーー白鳥警部どのーー。」

・・・高木くん＝＝＝

「犯人の動きはなしでいいんですね」

・・・動いていたら私達ここにはいないわよ」

あつ ほほほ - - - - そうすね (汗) 」

一 後は頼んだわよ

「はい!! 人とも会うぐり休んで下さい!!」

「高木さん！――遅れました／＼／＼」

「見たらわかる」

時刻は10時43分

## 一時間の遅刻

「……………」んなに遅れたんだ……

「あー僕低血圧で……」

僕だつて低血圧だよ……

「もしかしての佐藤さん達との交代では？」

「そうだけど……なぜ？」

「いやあ高木さんの頭がぐしゃぐしゃですか？」

・・・なぜそれだけでわかる

「高木さんが髪の毛をぐしゃぐしゃにして張り込みに来たときは大抵佐藤さんがからんでますからね／＼まあ彼女に簡単にいえ、残業させたくないんですね～」

「その天才な頭、事件のトキに使え」

「わかりましたあ（汗）」

そのまま時間は過ぎ、交代の時間になつた

「お疲れ様でした」

「後は宣しくお願ひしますね」

「了解しました。高木警部補」

「ただいま」

僕はいつもより早めに帰れることになつた

「パパお帰り」

妙和だいま

「あのね、ママがねおばあちゃんとケンカしてるの」

ケツケンカですとー

「たつただいまです！……！」

「あら迷へん（やん）早（はや）いのね」

「あれつ？ケンカは？」

「ケンカなんかしてないわよ」

「妙和がなんか」

「ああこれよこれ」

・・・煮物？

「いやあ私は薄味の方が好きなんだけどお母さんが  
「涉さんは絶対に濃い口派だ」とか言つて〜」

涉くん、薄味派よねー

「僕どっちも派なのでどちらでも大丈夫ですよ」

ほつとしたよつな落ち着いたため息が聞こえる

これでケンカ、なくなるのかなー

## 8 (前書き)

検問終了

- ・ 普通検問はだいたい交通課なのに何故捜査一課なのだ！！
- それは殺人事件の捜査だからだ！！

その日の食卓には美和子さんが作ってくれた料理が並んだ

「・・・薄口か濃い口か・・・」

「涉さんならどちらを選びますか?」

「・・・ええっと・・僕はどちらかと言われても・・・」

「涉くん・・・早く言いなさい」

そんなに攻めないで・・・

「みつ妙和は?」

「薄口と濃い口って何?」

・・・そうか・・・まだ分かりませんか・・・

「僕は薄口派ですかね…」

「わかつたわ」

・・・これで良かつたんですね

次の日・・・今日は家族みんなでお墓参りに行くことになっていた

美和子さんのお父さん、  
佐藤正義さんのお墓に…

「アマ～ルの大きい石句？」

「墓石が、中におじこちがこめのよ～」

「おじこちがん？」

あー渉くんのお父さんは優さんで本人の希望から優ちゃんとあだ名  
呼びしてゐからおじこちがんがわからないのか…

「アマのパパ～・・・」

「く～・・・警視庁の刑事さん？」

「……」

何故知つてゐるの？

私は一回も書つてないわよ

「お母さん書つたの？」

「書つてないわよ」

「渉くんは？」

「いえ・・・僕は正義さんの」と全然知りませぬし

それはそれでどうかと・・

「妙和、なんで分かったの?」

「だってママとパパ刑事さんでしょ?だから」

「・・安易ね・・」

「?」

8 (後書き)

理江が担当しました

墓ネタ、最近墓参りが多くつたこともあり書きたかったんですねー

つぎはもうひとつ分かりやすく書くぞーーー（ 決心

## 9 (前書き)

今日は手持りふたの為出来る限り更新したいなあと思っています

\* \*

もつ勿論、手は抜かないですよーー(。 。 · · · )

お父さんー…

私はもう33歳になつてしましました

妙和は4歳です

涉くんが我が家に来てから5年が経ちました

そしてお父さんが我が家を去つてから27年ですね…

あの頃の私は人を好きになるのが怖かったです。でも、いまは違います

人を好きになり、愛する

それが私の使命です

お父さんー…今まで見守つてくれていてありがとうございます

そして松田くん

相変わらず萩原さんと吊るんでいるのかなあ

これからも私達のことを見守つていて下さいね

(涉)

正義さん、お義母さんと結婚し美和子さんを貴方の娘さんにしてくれてありがとうございます

貴方のおかげで今、一人とも幸せです

9 (後書き)

まだ続きます

## 10 (前書き)

救急箱つて私なんか好きなんだよね♪

まあ怪我をするのは私じゃなくて私が技かけて受け身を失敗した舞  
矛だけね

常に救急箱は包帯で一杯(笑)

あれから14年がたつた

「今日からここ捜査一課強行犯捜査一課に配属されできました高木妙和です。皆さん知つてると思いますがよろしくお願ひします」

高木と佐藤の子供の妙和が捜査一課に配属が決まった

「担当は・・・中原淳沙くんよろしく

「了解しました」

「中原くんよろしくお願いします」

「いじつじじじじじ」

今中原くんが舌を噛んだ理由

勿論妙和が佐藤そつくりで可愛く美人だつたから

それ以外に理由はない

「高木涉！――取り調べ終えました！――」

「ああ高木くん早いね・・・」

「・・・田島さんもう少し取り調べが早く終わつたことを喜んでくださいよ」

「佐藤美和子！！犯人確保しました！！ただいまより取り調べを実行いたします！！！！あら・・・妙和！？」

「今日より捜査一課強行犯第3係りに配属になりました！！！ヨロシクお願いします」

「・・・佐藤さん、取り調べ、拝見させて頂いてよろしいでしょうか」

「あら中原くん・・・どうして？」

「今後の高木さんに佐藤さんみたいな取り調べの仕方を仕込んでおきたくて」

「まあいいわ・・・渉ぐーん取り調べするから同行しなさい、救急箱持ってきてね～」

「「きゅつ救急箱！？」」

どうして取り調べに救急箱がいるのかわからない一人だった

10 (後書き)

はつ話飛びすぎたああ！！

救急箱は直ぐに使われることになった

「俺は無実だああああーー！」

「そう叫んだ犯人が逃亡」をはかりーー・

「あつ・・・・」

「ウラアアアアアーーー！」

きれいな佐藤さんの背負い投げがきまり、犯人は取り押さえられた

「バカねえ・・・痛い目に会いたくなかったら逃げようなんて考え  
なかつたら良かつたのに」

「・・・・・」

その後取り調べは無事行われた

「バツカツタレーーーー！」

「バツカツタレ?バツカツタレじゃなくて?」

「相手が別れ話を仕掛けてきた、だから殺した・・・言い訳になつてないじゃないの」

「あんたには言わたくないぜ。どうせあんたは人生上手く・・・

「バシッ！……！」

「貴方は命の重さがわかつてない！！私ならもし渉くんが別れ話を仕掛けてきても、・・・好きだった彼氏を殺したりしない・・・大切な人には幸せになつて欲しいから・・・私ならその人と居た時間を大切にする」

「それはあなたの考えだ」

美和子さん・・・

「確かにそうよ・・・でも私は渉くんが別れ話を仕掛けてきても、・・・離婚したいって言つてきてももう一度話し合いつ・・・直ぐに殺したりはしないわ」

「・・・俺は相当な大バカ者だったみたいだな・・・」

こうして事件は終止符を切つた

「妙和、中原くん」めんね／＼取り調べらりしく無くして

「いえ／＼でもかつて良かつたですよ。佐藤先輩」

「・・・お父さんって愛されてるわね・・・」

「へへへ・・・」



雑テスク・・・

雑すぎる・・・ごめんなさい

取り調べは思つていたよりも長かつたらしく取調べ室をでたら既に日が暮れていた

「妙和は今日何時上がり?」

「ええっと・・・確か8時上がりだつたと・・・お母さん明日非番だよねー」

「ええ。あつそつだ~郵便局でハガキ30枚お願いできる~」

「いいけど何で?」

「クラス会だつて~」

「...お母さん参加できるの?」

「無理だからハガキを担当したのよ」

「行つたら?」

何を言つているんだね?この子は何

「だつて20年近く行つてないんでしょう?」

「その田は田直よ。行けるはずないじゃない」

「こーじゅん~」

「・・・」

「美和子さん犯人の連行をしますので一緒に…」

「あつうん！…あつそつだ妙和！…聞き込みとかの時は「佐藤さん」つて言つてね」

「・・・なんで」

「同じ課にいるなんて何か恥ずかしいもの」

「あつそつ」

「美和子さん！…？？？？」

「あつうん今いくじやあ妙和、ハガキヨロシクね」

「ハイハイ」

## 12（後書き）

私も同窓会企画係だつたなあ・・

参加ができないためハガキを送つてます

何故か

特に意味はない

でもお詫びの気持ちを込めて人数分のハガキをもう一人の担当に送る

私は今東京にいるんですけど実際のふるさとは大阪です

最近ずっと美和子さんの熱が続いている

「今日病院行ってくるわ……流石に2週間続いているし……」

「あーお母さん私もついていく

「あなた仕事は?」

「今日非番」

「おめでとうござります

2カ月です」

「ほえ?」

「本当ですか!?」

妙和はいつもよりハイテンションだ

「今何て?」

「・・・おめでとうございます。・・・年の離れた兄弟ができたんです  
よ...」

「ええー...?」

「涉くんお帰りなさい」

「ただいま...どうだった? 病院での診断」

「あつお父さんおかえつ~」

「妙和お風呂沸いてるわよ」

「わかった~」

.....

「2ヶ月だった」

「・・・へつ?」

「妊娠してた」

「えつ・・・」

「今が11月だから・・・7月に生まれるよ・・・」

「本当にですか！？」

「なつ何涉くん泣いてるのよ・・・」

「嬉しいんですね」

「・・・私もよ・・・」

「妙和と違つて次は夏ですね・・・」

「そうね」

「大丈夫です！美和子さんは僕が守ります」

「ありがとうございます」

### 13 (後書き)

たつ高木！－美和ちゃん絶対守れよ！－守らなかつたらお姉ちゃん  
が許さないからね

高佐好きさんからのリクエストでした

でも続編

## 14 (前書き)

涉利 = くしょりと読みます

時がたつのは早いもんだ

「涉くんもつ上がり？」

「・・・あつ美和子さん…はい…！報告書も書き終わりましたし…  
涉利のお迎えいってきますね」

「本当に？」

「僕が早く終わらせたら駄目何ですか…」

少し拗ねてみる

「ええ明日雨が降るわ

美和子さんひどいです

「じゃあいってきますね」

「いってらっしゃい

僕は先輩達に挨拶をし一課の大部屋をでた

「「んばんは…高木です高木涉利のお迎えに来ました」

「…・・・涉利くん…？」

「はあ・・・・」

「…・・・友河さん…警察に通報して…」

「はいっ…」

・・・・・なんだ

「あつあの・・・・」

その時僕の仕事用のケータイが震えだした

「はいっ…・・・高木です…！」

「涉くん…? 今ど?」

「ど…ひて…・・・保育園まで来ましたよ」

「えつ? 犯人逮捕したの?」

「いえ・・・・」

「早く…!…!」

・・・犯人?

「えつ？」

「もー何しているのよー今、保育園前に怪しいケータイで電話している人がいるのよー！」

— 三二二 —

僕は保育士さんの前に立った

「あの・・・勘違いです・・・警視庁捜査一課の高木と申します」  
涉利の母親と同じ警視庁にいます・・・」

「えつ？」

わーたる！！！！

アーティストの才能を發揮するための環境を整える

一 遽捕したの？

「あ、そのお：僕の事です」

17

「あつあの...すみません間違えて...」

「...せいか」

「すみません切りますね」

そう言い、電話を切った

「今日、妙和さんが引き取りに来て…お父さんにしては若くて…ん  
でその…初めてお会いしましたし…すみません！…！」

…所々不機嫌な言葉も混じっているが良いか…

「いえいえ…僕こそ妙和には聞いてなくて…」

僕は保育士さん達に頭を下げ保育園を後にした

## 14 (後書き)

涉利くんまだ出てこない…

今日の非番なくなつた…悔しいです( ̄ ̄ )#

犯人に愚痴

「ただいま」

「あつ渉くん・・・とんだ不幸だつたわね」

「ええ」

美和子さん・・・帰つてましたか

「あつ・・・お父さん、『めんなさい』・・・」

妙和があやまる

「いいよ・・・てか僕つて不審な顔立ちかなあ」

「ん、一最近老けて来てるからねえ・・・」

美和子さんひどいーーー！

「パアパア・・・」

「おお渉利・・・ただいま」

「あー」

まだまだ可愛い息子

どんな未来になるのだろうか

「なんか焦げた匂いがします…」

「あつイケナア イ… 肉じゃが火にかけっぱなしだ…」

「肉じゃがですか… つてええ…」

「大丈夫よ済したから」

「のままずっと危ない日が続くのは流石に嫌だな

「渉くん渉利とお風呂入つてきて」

「は」

平和な日が1日でも長く続きますよ！」

## 15 (後書き)

終わりに問題がありますが一応続きます

高佐対談しかしてない

妙和ちゃんと涉利くんもなるべく出したい・・・

リクエスト、バンバンどうぞ！

佐藤さんかぞえたら48歳ですが・・・見なかつたことにしてください！

今日は偶然美和子さんと僕の非番が重なつていた

一年に一回重なるか重ならないかの非番

「トロピカルマコンラング」に行きましょつか

急に涉くんが壇に出したものだから内心びっくりしている

「今日?」

「ええ

「今から?」

「勿論」

急に涉くんから出された葉っぱにはビックリさせられる

「だつて涉利まだ2歳になるまへよ」

「涉利が10歳くらいになるのを待つていたら僕たち50歳になつてしまひます」

「・・・まだ体は20代よ」

「まあ毎日犯人と追いかけっこですもんね」

「ええそつね

「・・・・で行かないの?」

「あつ開園まであと20分だ...」

「今日に50万人達成とかなんかあるの?」

「あつバレてました?」

流石美和子さん  
なんでもお見通しだ

「景品は?」

「マリンランド入場券... 50回分」

「いこつかあ

「えつ?」

「早くいくわよ

「はつはつ!」

## 16) 後書き

50田前<sup>田</sup>の高佐ですが  
まだまだ体は20代!!

心も20つしたことにしてください!!!!

## 17 (前書き)

今日は帰つて夕方までぶつとうじで寝るぞーーー。  
次の更新は明日かなあ……

2日間徹夜だったから寝かせて……

つて事で僕たちはトロピカルマリンランドに来ていた

「人、少ないわねえ」

「そうですね…」

三三三歩く涉利から田を離さないようにしながら歩く

「お父さん…お母さん…」

その時、勤務中の筈の妙和が走ってきた

「妙和どうしたの?」

「あのね…ここで麻薬の密売が行われる可能性が高いんだよ…だから張り込み」

僕も麻薬の密売を追いかけた事があるなあ  
あの時の指輪のローンは痛かった

「どんな男?」

「違うの、今回は女…写メ送るから」

妙和から一枚の写真が送られてきた

「…朝霧夏樹?…」

「お父さん知ってるの?」

「ああ美和子さんが昔撃たれて意識を覚まさず寝ていろとき、起きた事件で…被害女性が朝霧夏樹なんだ」

「…私、意識戻つてから聞いてないわよ」

「…言つてなかつたです」

なんか嵐の予感

## 17 (後書き)

警視庁出でるぞ！！  
帰つて寝るぞ！！

次は明田の早番か・・・

久々の更新のような気がする

じゃあ朝霧夏樹を見つければいいのね

美和子さんは呟いた

「うううんまあ…」

「涉くん、パレードの時に来ましょ」

「ううう…」

何を言つてゐるんだね？  
娘が担当してゐるヤマだぞ！？

「私の長年の勘ではパレードね」

「どうして？」

「人が多いから」

普通反対じゃないか

「でも、少ない方が…」

「少なかつたら少なかつたで顔なんかすぐこ覚えられりやうわ

なるへそ…！」

「パレードは7:30ね。時間まで遊び尽くすぞー」

体力がなくならない程度にしてほしいな……

18 (後書き)

弁当作らせたらよかつた（汗）>= 美和ちゃんに

更新遅れてごめんなさい

「渉くん……」「一ヒーカップ行くわよーーー！」

いつまでも元気＆元気。体力がある美和子さんはすごい

「はつはーーー！」

どうある事もできずにじぶしうつこしていく

「早く」

かわいい…

「あつ……」

「渉くんどうしたの？」

「いえ……」

ヤバい…白鳥さん一家だ…白鳥さん、小林先生、そして一人息子の  
澄朗くん…

「白鳥くんじゃない」

いきなり声が聞こえたかと思つと美和子さんが白鳥さんと声をかけていた

「わあ…」の子が澄朗くん?似てるわね~

「みつ美和子さん？」

「涉くん……白鳥くんと小林先生と息子さんの澄朗くんだよ……流石親子……似てるわねえ」

「佐藤さん……高木くん……」

「！」と止む。田嶋さん今日非番でしたつけ……

「いや……密売だよ」

「ああ……」

「んで今日は帝丹小も休みだから澄子さんたちに手伝つてもいいっていふんだ」

「際ですか……」

「高木くんたちは？」

「こやあ久しぶりに非番が重なつたもので……」

白鳥さんは羨ましそうな顔をしながら、「見つけたら電話をしてください」と言ひ、僕たちの近くから離れていった

19 (後書き)

次はもう少し早くに更新を…

20 (前書き)

20だ

これは事件なのか(笑)

「白鳥くんも大変ね… まあ早くコーヒーカップ乗りましょ」

「はつはいーー！」

案の定僕と涉利は酔つてしまつた

「もー… 大丈夫？」

「だめ…」

「お茶買つてくるわ… 涉くん。緑茶でいい？」

「任せます」

「もつじきね…」

「えつ？」

「麻薬の密売」

「まさか忘れてたの？」

「 いっ いえいえ…」

やばい 忘れていた

美和子さんのコーヒー カップで飛んだのかな

「 じゃあ 行きましょ 」

「 はい 」

僕たちは事件に関わっている間、小林先生に涉利を預けることにした

「 先生、 お願いします 」

「 了解しました 」

僕たちは小林先生に涉利を預けて走った

20 (後書き)

次はもっと分かりやすく書いていき（^-^）▼

## 2.1 (前書き)

かつ書いたぞ…  
内容進みすぎた(汗)

「 いとうら佐藤、ただいまターゲット（朝霧夏樹）発見……!! ラクル  
観覧車前に至急応援を」

「 了解、直ちにそちらに向かいます」

「 動きないです」

「 そうね」

「 いっしに……観覧車の前に……男性が」

急に走ってきた男

指名手配中の赤羽周作

「 指名手配中の……」

「 ええ…… いっしにしたら好都合ね」

「 パッパカパーんーー」

パレードが始まった

「 いとうら佐藤&amp;高木、いまから朝霧達の後ろに並びます、

ばれぬよつ監視をします。私達はフ…」

「佐藤くん…? どうしたんだ」

「「」は私、高木涉と妙和がいきます」

「「」はとても大きな観覧車があることで有名な遊園地

「たまたまフ2番のゴンドラが…」

場所は違うが松田刑事が爆死したフ2「ゴンドラ

「佐藤くんは今?」

「…」

「分かつた…高木両名、よろしく頼む」

「<sup>ラジャー</sup>  
了解」

終わりがやばい

高木両名のおかげで朝霧と赤羽は逮捕された

「美和子さん、大丈夫ですか？」

「……」

泣いていることがよくわかる

「お母さん……」

「松……」

昔に恋をしていた松田陣平刑事の事だろう

「あのとき約束しましたよね…僕は絶対に貴女の側からいなくなら  
ないって…大丈夫ですよ?」

「?」

妙和はなんにも知らない  
妙和が生まれる前の話

「これから2番の『ソンドラ』が来ても貴女を(多分)泣かせません

「…・本當?」

「はい……多分ですか？」

……誓います

いくら長い年月がたつても貴女を泣かせません

貴女より先に死にません  
貴女を残して逝くなんて僕にはできないから…

## 22 (後書き)

高木！－！絶対に誓えよ！－！

あーまだ続きます（笑）

いい終わりだけど涉利全然だしてない

「小林先生、ありがとうございました」

「いいえ、渉利くんお利口さんでしたよ」

「ははは…人見知りなもので（笑）」

私達は渉利を小林先生から引き取り取りトロピカルマリンランドを後にした

警視庁

「田暮警部…来ました…」

私達はその間由美に渉利の面倒を見てもらうことにして

交通課なら面倒を見てくれる婦警さんが沢山いる

「事情聴取中ですか？」

「ああ…なぜか皆泣いてな」

「まつ？」

意味がわからない  
もしかして涉利が僕似だからか？

「デスクワークひとつか」

「やつですね」

「あー高木さん！？ 今日は非番だつたんじや……佐藤さんもー…？ もしかして交通課にいたのは涉利くんっすか？」

いきなり飛び出したのは千葉くん

「お前何で交通課に？」

「いやあ曲りちゃんが弁当作つてくれて……それとつに

「ふーん」

確か千葉くんと三池さんって同級生だったつけ

「佐藤さん……なぜこいるのですか？」

「…アロペカルマコンランで麻薬の密売を見たから」

「お前が三池さん」弁当貰つてゐる時にな

「ハハ…僕だつてすとゞ通課にいたわけじゃあないですかよ」

「あつ…田嶋くん…終わつたの?」

取調室のドアが開き、田嶋が出てきた

「ええ、全部吐かせましたよ」

「テープ貸して」

「えつあつはい」

佐藤はテープにイヤホンを差し、聞き始めた

「…」

「美和子さん?」

「静かにして…」れ、音おひがいやいんだから

「は…」

その日は内容を原稿用紙に訳してからの帰宅になつた

「涉利寝ちゃったわね」

「ナニですね」

私達は夜の交差点を静かに走つていった

「明日は朝からか

「ナニですか」

「夕飯は適当でいい。」

「ナニですね」

「・・・寝かけてる?」

「すみませんーーー。」

助手席の涉くんは涉利を抱きながらひいひいしてくる

入学！！

「涉くん…涉利の入学式、遅れるわよ」

「はっはーー！」

今日から涉利は1年生になる

「お父さんーー！早く～」

「ねつネクタイが…」

ネクタイがこんがらがつてている

「やつてあげるから動かないで」

優しい美和子さんが直してくれる

「早く行きましょ」

「はーーーー！」

私達は帝丹小学生に涉利を入学させた

理由は警視庁に近い、新一くんと蘭さんの子供の瑠那くんがいる、  
いまだも小林先生が勤務しているというすぐ簡単な考え方

「シニアカーの父さんと私は入学式終わったら直ぐに警視庁いかなきやダメだから…ホームルーム終わつたら警視庁きてね」

「うん、わかつた」

私達は早番の妙和に涉利を連れてかえつて貰つて「…」とした

さすがに帝丹小学校から自宅までは4つはある

「お姉ちゃんのところへくんだけよね？」

「うん、行き方はわかるよね？」

「やつらのん…」

涉くんの用意が終わり、私達は赤いアンヒィーに乗り込んだ

季節外れたよ…

春話つて(笑)

入学式も無事に終わり、後はクラスみんなで自己紹介をしてから帰ることのこと

「あとで警視庁行くからね」

「捜査一課に行くのよ」

「分かってる」

担任は白鳥先生

「自己紹介は名前、誕生日、将来の夢、家族について言つてね」

渉利の番

「高木渉利です。」

誕生日は1月10日

将来は警視庁の刑事

家族構成は警視庁で勤務しているお父さん、お母さん、お姉ちゃん

です

言えた

「よろしける願いします」

「高木～サッカーしないか？」

「～めんね…家が遠いからお姉ちゃんに送つて貰うんだ

「ふーん」

「バイバイ」

「おお…」

「確かにこいつで…」  
「シラーケさん…」  
「うううわあ…由美さん」  
「他の誰に見えたる?」  
「さきなう抱きつこうとして抱き上げてくれたのせが通課の西本由美さん  
「ねつておじいだやれ」  
「美和子のところへ。」  
「うそ」  
「今は休憩室にいるわよ」  
「あつがどう…由美さん」  
「…私も行くわよ」  
「?」  
「お姉ちやさんが『ココア』奢つてあげるわよ  
「ここよーお出でこらるんでしょ?」

「多分ね」

「？」

「大部屋にはいないわよ」

「妙和姉ちゃんは？」

「もうすぐ帰つてくるわよ」

「お父さんま？」

「神奈川まで行つてゐる」

「・・・」

「行くわよ」

「うん」

由美ちゃん出してみた  
ひが、由美ちゃんのキャラもすきやなあ（笑）

「由美さん可愛すわんだよ…  
さすが高木と美和子の子供ね

「由美さんケータイ持つてる?」

「ええ持つてるけど」

「貸して下せー!!」

ケータイを渡すとキー ボードを押し始めた

「0906……」

電話するのね…

「あつ…お母さん?」

「美和子にかあ…妙和ちゃんかと思つたの」

「こま?由美さんと休憩室にいるよー」ココア着つて貰つたんだ

素直だなあ…

「うん…分かつたお母さんのデスク前ね…待つとくか?」

そつ言つと電話の「切」を押した

「由美ちゃんありがとう」

「どういたしまして」

「僕、一課にこぐねーーー！」

「またね」

「うそ」

涉利は一課田掛けて走つていつた

「お母さんーー！」

「涉利、お待たせーー！」

なぜか後ろからガヤガヤ聞こえる

「何がありました？」

今日は11月7日……

「爆弾は何処ですかーー!?」

「我々はグリーンの神…」

「はあ？」

いきなり白鳥がしゃべりだした

「20年前の敵を取るべく日本のリーダーに七色の花火を取り付けた命が惜しいなら外せばよい

だがついでに1000万人以上の人質が出る」

「文才ゼロね」

「ええ…多分文は今、まだ牢屋にいるものが書いていたかと…」  
この文はどうせ警視庁…

警視庁に爆弾があると言つ」と

「裏に何か書いてるわよ」

白鳥は裏を向け文をよみだした

「沢山の部屋の大部屋…隠しは鉄箱

その花火は建物全体を破壊しす

「…阿笠さんから預かったのも鉄箱よね?」

「トロピカルレインボー？」

• • • • •

やばくないのか？

「トロピカルレインボーは米花博物館で結局使わなくて… 今度の廃校を爆破する為に預かってるやつよね？」

「たつたしかに…」

「廃校を軽く爆破するくらいだから… 警視庁のなんか簡単よね…」

ヤバイヤバイ

# 爆弾処理班呼んできて！！

「はい！」

キャラが勝手に動いて困ったよ（笑）

やつぱりトロピカルレインボーザのタイマーが動いていた

「正解ね」

「さつ佐藤さん冷静ですね」

「まあね」

ウインクは意味があるのか

「解体しましょうか」

「ええ」

「勇気ある警察官に次ぐ……」

「はあ？」

後ろからいきなり大型な男が現れた

「誰よ」

「… やあな

意味がわからない

「解体したら俺が吹っ飛びぜ」

まさか

男の体には無数の爆弾がセットされていた

「どうするんだ？」

男は低い声で挑発させてくる

「い」めんなさいね

いきなり佐藤が口を開いた

そして

「ウラアアア／＼

佐藤の必技背負い投げが決まる

「はずさせて貰うわね」

たつた10分の殺人（未遂）劇は幕を下ろした

「ばかだつたわね」

「そうですねー」

たしかにアノとお出でこなかつたら…

「まあ終止符を切つたわけだし…」

いきなり佐藤の声が途切れた

「美和子さん…」

佐藤をみると涙を流してゐ

「…いいですよ…泣いても、僕が守りますから」

「…松田くんの…」

「はい…思い出したのですよね…」

「うん…」

「僕は何があのと貴女を守ります…こなくなりません…」

「一度田のプロポーズ？」

「やつです」

「いなくなつたら怒るから」

「いっそ殺して下さい」

「殺人犯になるからやだ」

「…リアルですね  
現実的です」

「ありがと…」

リクエストまちです！！！  
ネタください！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0546y/>

---

デ力物語(未来)

2011年11月24日19時49分発行